

# 一泉

発行所  
〒921 金沢市泉野出町  
3丁目10-10  
金沢泉丘高等学校内  
一泉同窓会  
電話(0762)42-0211  
定価 1部 150円  
備 橋 本 清 文 堂

## 一泉同窓会 総会行われる

十月十五日恒例の昭和六十一年度の一泉同窓会の総会が催された。ここ数十年一度も雨に見舞われた

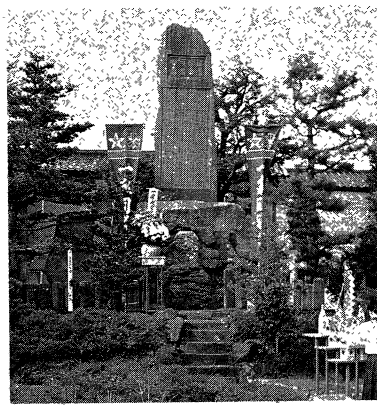


このかないという今日、昨夜迄降った雨はあがり秋晴れの一泉同窓会日和ともいふべき日となった。

当日午後三時より校庭の厳霜碑前に祭壇が設けられ、二流の同窓会標旗の許に渋谷会長、宮前会長、棒田泉丘高校長らはじめ関係者一同参列し、石浦神社長谷宮司の司祭で厳肅に祭典が行われ、全員が玉串を捧げて慰霊祭を終えた。これより会場を金沢ニューグランドホテルに移し、午後六時から総会行事に入った。

本年から総会、懇親会の企画、実施を各期の当番制とすることに、まず泉丘五、六、七回がその担当ということに決まった。初めてのことであったが担当各期の役員の大変な努力により、会場の準備、運営もスムーズに参加者も例年になく多く約二百五十名程の会員が集まり金沢ニ

ューグランド会場が手狭に感じられた。総会も順調に進行し、ひきつづき同場所で開催会に移り、東京、大阪よりの遠来組もあって、互に酒を酌み交わし、おそくまで談笑がつき名残りがつきなかつた。



### 当番期の役員として

副会長 中 谷 道 子

(泉6)

春の役員会に毎年の総会企画実践を当番制にしたら？と私自身の発言がとりあげられ、それのお鉢が泉5・6・7期ということになり大変慌てた。

前回迄は前副会長の小川忠男氏が責任者として詳細までやって頂いたのでとても助かっていたのが、今回からは自分達で実行しなければならぬので何度も打合せ会を行った。

山本道生副会長を軸に私たち三当番期は人員集めを精力的にやり、その結果もあって当日参加数は二四〇名を超えたようだった。

ホテル側も出血サービスというところでご厚意を頂き私たち最初としてはまあまあ出来ではなかつたらうか。と控えめの自讃を覚えている。

今回は総会に物故者供養の目録を入れたのは山本副会長の発案である。それも好評を得たようであった。会場にはこれも山本副会長製作のB・G・Mが一中校歌、泉丘校歌や各応援歌など歌詞入テープを流し、いやが上にも会場は青春の真っ只中という感を深くしたものである。

勿論いいことばかりではなくて料理のバラツキもあり、会場の広さも関係しているが少々無理をした処もあつたように思われた。

意外な処でのミスは屋外の案内広告看板の出す場所がその方面の条約で難しくなつたのは大変困つたことの一つであった。

失敗は成功の母という。来期も私たちはお手伝いすることにきまつたが、又忙しくなりそうである。

5・6・7期の方に深く感謝を申し上げるとともに、今後とも先輩のご指導と後輩のご協力をぜひお願いして私の一文としたい。

## 「泉」第十三号によせて

## 泉丘校蔵書解題目録の

## 編集を終えて (10)

## 異人館の文献 (泉丘校蔵書

## 整理日誌(3)

山 森 青 硯

(一 中三十三回卒)

金沢二中錦丘高校々史―昭和48・10・15刊(以下二中本と云う)十一頁に左記所載

第二中学校が仮校舎として借用した勸業博物館は、二階建洋館建築ながら建築以来二十余年を経ており、明治二十年創立当時の石川県工業学校、同三十二年に石川県第二中学校が、翌年には市立金沢商業学校もまたそれ／＼仮校舎として使用しており、学校創立の歴史と深い関連をもつ由緒あるものであった。

とある。七十年史、石川県立工業高等学校創立七十周年記念会(以下工業本と云う)十三頁に

金沢工業学校は明治二十年七月石川県勸業博物館を仮校舎とし、納富介次郎校長のもとに男女生徒百三十七名、研究生男女六十九名をもつて開校した。十月二十六日日

を改めて文部大臣森有礼を迎へて開校式を成興閣で挙げた。森文相は第四高等中学(旧四高)施設視察のために来県したのであるが、中等学校の開校式に文相が出席したことは何と云つても珍しい。恐らく納富校長の幕末以来の経歴と中等工業学校の草分けと云う処に敬意を表したのであらう。

開校式には生徒代表として島田佳矣が祝辞を読んだ。同年八月かねての予定にしたがつて出羽町一番丁にあたる兼六公園内のもとの「金沢学校」跡へ移転した。五八五坪の敷地に四八四坪の校舎があり、学校の体裁を整へて来た。

とある。金商七十年史(以下金商本と云う)八頁に左記の如くある。

仮校舎と学校規則。本校最初の校舎となつた建物は、兼六園山崎山と現在の美術館(移転前の同館で成興閣の一部)の間に位置し、もと独人フォンテッケン(明治四年招聘の鉱山学校教師)の居館であつたが、明治九年(二七六)には金沢博物館の一部となり、明治十三年(二八六)以来石川県勸業博物館東本館となつていたものである。その規模は洋風二階建て建坪一五九坪(五二五平方米)長方形(約南北九六・五寸、東西一〇六・五寸)を呈し、開窓ベランダ付(二階)を特色としていた。

この東本館は明治十三年以来各府県産出の物品を陳列してあつたものであるが、金沢市が県知事にその貸与を申請し、同年四月十日その許可を得たものである。

とある。以上三校の詳説は本校と何等の関係無い様であり、否関係がある。泉丘校本蔵書印「金沢学校」(青朱)の何たるやを知る資料である。

就中最後の金商本は、未だ既載になき異人館歴を所載してある。而してデッケン異人館写真の第三番目の発見である。

昭和54・6・8午前九時、北国新聞温井伸記者来室。(大屋愷故編世界図の件につき)橋本確文堂来室(此の人泉丘校出身、垣田先生が恩師であると云う)。山岸、垣内両先生来室(各々委員指命に就て)

泉丘校本「気海観瀾広義」和蘭字彙「二稀観本に就き左記資料登録。日蘭三百年の親交(村上直次郎)大正4・9・4富山房版(泉丘本)」

西多外喜次氏来室(連絡誌発刊の件につき)

前述デッケンの異人館を広坂通に移築し、益智館と称す(郷土数学一七二頁)。「金沢四十八名所」七四頁も右の如く誌す。デッケン館は二階建也。広坂通メソヂスド館(再移築したもの)一階建也。根太高き所の

みデッケン館に酷似している。

もう一つの異人館説がある。小川孜成著の「兼六公園誌」坤(明治27年7月刊)には

西医ノ舎館明治四年恭敏公。和蘭国陸軍一等医官ヘイア・スロイス氏ヲ聘シ、城内玉泉院九二館セシメ、医学館ニ於テ生徒ヲ教授シ、又患者ヲ治療セシメタリ。(今広坂下ノ洋館英学院ハ此館ヲ移セシモノナリ)

(本館ハ後、広坂下ニ移リテ耶蘇教会堂となりしが、近時更に他処に改築して其旧容を失ひぬ)

とある。泉丘校図書館書庫に「日本武尊銅像前石段の処に、洋服姿の者四五人写る硝子盤(ゲント種板)が在る。向つて最左立像がスロイス像であると云う。

長らく異人館と称され、是れを広坂通りに移築、英学院、益智館、警察署、メソヂスド館と成つたと云う説。尚研究を要す。



# 同窓の随想

## 「一泉」を読んで

半田 正雄

(一中二十三回卒)

会誌「一泉」を毎号読ませて頂いております。私共の時代の方の消息がないので淋しく思いました。私など持病がある者は余生幾何と思っておりますので感慨も一入深いものがあります。校歌の替歌を読んで懐かしい先生がまだ御健在のような気がしますがアゲ名も姓名も知らない先生が多いことも自分の老を思わせませす。

(3)  
ブラマは教頭先生、次席にヤシヤマ(恐ろしい先生)センマとチョイトコ(宮本)は博物の先生、イボニ(藤井)は漢文の先生かと思っております。トリヤ(安田)は徒手体操の先生、ガニ(川崎)教練の先生、ガシメは歴史の先生、英語の岩崎先生はハイチン(ハイカラで背が低い)東京高師を出て着任した化学の高橋先生は就任の挨拶に桜章校の健児諸君と叫んだのでオーショーコー、幾何の先生は新任の挨拶に壇上に立たれた時鼻筋が少し曲っていると見られインカーブ、歴史の先生は少し斜

視なのでガンメ、アゲ名はこれくらいしか思い出せない。富田弥作先生(修身)上山小三郎先生(算術)の二人は勤続二十五年で表彰されました。剣術では都賀田先生、先生のお子さんは勇馬といって陶芸家になられています。

私の大分先輩である小塚太郎(コツ)という人は冬雨天体操場で四個出している大火鉢でゴールデンバツトを喫っていたらトリヤ(先生)が廻わって来て一緒に来いと叱りつけたら火鉢の縁で煙草を消して鴨居の上に置いてついて行ったのでトリヤ先生も持て余して校長室(久田督先生)へ連れて行かれた。校長は「小塚は何時から喫んでいるか」と問い「小学二年から」と答え「何うしても止められないか」「何うしても止められません」と答えたら「それじゃコツソリ喫め」と言われたと感激していました。久田校長は私が一中に入る前の年に亡くなられ全校生徒が葬列に従い、上級生が代る代る棺をかつき大きな造花(竹竿に割竹を柳のようにさげてそれに紙の切花を貼りつけたもの)が何十本も続いて棺の前後に従い丁度長町六番丁に住んでいたの御荷川の岸を通るのを見て感激しました。

話は変わりますが当時は落第生が沢山いました。私の入学した時は一年

人員一五〇名と発表されましたが新入学生は一二九名でしたから二一名の落第生があったのです。三組に配分されて各組に七名宛いました。師田先生(体操)が体操の時間に「落第生は集まれ」と中央に集めその周りを新入生が円陣を作って廻わり、落第生の音頭で校歌を習いました。八年、十年在学した生徒もいました

国本(アンチ)は浅の川大橋を渡って観音町へ入る角の傘屋の長男、登校姿はゲートルを足に着けず手に持っていて、当時の小松校長(髭をはやしていたのでナマズ)は服装がやかましくなり生徒の反対にあっていました。彼は完全に十年いて卒業(卒業前に毎年演説会が開かれるアンチの題は「大隈伯と我輩」大隈伯は国家の元老である然らば桜章校の元老は誰ぞ曰く我輩とやって大喝采を博しました)。

私が五年生の時隣の机に八年在学の松本(エビス)と並びました。試験の時どうせ俺は今年卒業するんだからと答案を書かず寝込まれたのに困りました。新入生の時体操の先生から個々に姓名を名乗らされた時「停車場前のエビスを知らんか」と昔のことは大分忘れてしまいました。だが悲喜交々と感慨深いものがあります。思い出すままに……。

## 金沢一中在校時代と戦時中の思い出

森岡 憲一

(一中三十二回卒)

八十近くの老令でもあり、六十年以上も経っているのに、殆ど忘れていないが記憶を辿って書くことにした。私は大正十四年卒業の三十二期生である。四年迄寄宿舎で生活した。寄宿舎では同期の木崎俊雄、向井庄太郎、穴田隆英、又野政次、木戸晋二等が居り、盛り切りの御飯では夜七時過ぎると腹がすくので、木崎や穴田等と共に時々門を乗り越えて、香林坊のくらやへうどんを食いに行っていた。舎監のイナリシヤ先生に見つかる、大変なことになると思い乍らも、幸い一度も発見されなかった。同期生との交遊には色々なことがあった。愛知県より来ていた杉浦重厚という男がいた。ロイド眼鏡を掛け、いつも両手をズボンの物入れに入れて歩く男だった。日曜の或る日彼に誘われ、湯涌温泉迄往復徒歩で入浴に行ったことがあった。富山県城端より来ていた野村俊太郎(後に理兵衛と改名)は財閥の息子で、市内の高女へ通っていた姉と共に、女中付の持家から通っていた。私が遊びに行く姉がいつもピアノを弾いていた。又神戸の芦屋に別荘があり、長い休暇になると必ず別荘へ休養に

